

911.3

7



袖珍抄消息之部

古終舎黙池輯

一ツ此抄はくそやおりの切くそ
 一ツき抄をよまはれははすから
 一ツ感心尺さすありありあ
 一ツ子光子の清足の時と
 一ツ去はるか厚と上達存も
 一ツ凡て下の御供もてい
 一ツ今もねいそつをけい
 一ツ秋の序りより一板の
 一ツPは素こ相違ふも
 一ツとむを結つて
 一ツ外に中より
 一ツ何もの
 一ツあつて
 一ツえ
 一ツつ
 一ツ招
 一ツ白
 一ツ

かき入るる所より世の持負
らるるはかたしとて持負一を
多し中より自見は先大に
少し中より能くしんをわくし
少し中よりむく有り自見一能を
振自多し中よりむく有り
やそ中より能くしんをわくし
り能くしんをむく有り
白石くむくしんをむく有り
一御世地を能くしんをむく
有くしんをむく有り
に何れしよむくしんをむく

叙のまゝのまゝに
きかぬものか
いふ事

○ 廿九日

○ 此の編纂は、先づ、
松平の、
後、
徳侯、
難儀、
下り

○ 秋の、
志、
目、
若、
古、

○ 白、
白、

○ 一、
日、
さ、
ひ、
一、
一、
一、
一、

○ 一、
二、
一、
一、

○ 廿九日

○ 一、
一、

ひの人をたすけし予、船評がま
らふゆゑに舟を乗せ給ひ候へり
念ひ候へり候へり候へり候へり
詠じしつゝ、舟を乗せ給ひ候へり
ひらめく舟の心持は候へり
そ附り

森の中へお出遊せよとて
とつゝお出遊し

春のあつたの跡をいふ

二月上旬 本園

本園様

そなたさま

兼輝もたて或人の舟をたすけし
念ひ候へり候へり候へり候へり
船評がまらふゆゑに舟を乗せ給ひ候へり
念ひ候へり候へり候へり候へり
詠じしつゝ、舟を乗せ給ひ候へり
ひらめく舟の心持は候へり
そ附り

とつゝお出遊し
は候へり

廿五号 兼園兼光七

春遊記

兼光の舟を乗せ給ひ候へり

候へり

春のあつたの跡をいふ
本をいふお出遊し

二月下旬 本園

そなたさま

福美の舟

抗遊川の舟を乗せ給ひ候へり
念ひ候へり候へり候へり候へり
詠じしつゝ、舟を乗せ給ひ候へり
ひらめく舟の心持は候へり
そ附り
舟を乗せ給ひ候へり
念ひ候へり候へり候へり候へり
詠じしつゝ、舟を乗せ給ひ候へり
ひらめく舟の心持は候へり
そ附り

志とて薬のすよ一めんいふこと
ふ里と爲く日物とちいし
とて思ふのふふやういふ
日分被るはさるゝとて
少く助料言ひまらんお書付
きしれ思ふ一毫の違ひ
寛ふふい

自後の句

古傳まて人たふ橋を付く者
忘さくとも忘さくしりまして
若ふ鳥を付て一おふの志を
附しけし時あはれはさるいひ
向をひきまて古傳を来来
一るの橋りまの時秋風来て
芭蕉の流もろく破れんや
此一はこれのこに存するり
少くち鼻さるくおと次お肩
のあつりおふすすもつた
あつりい



飲酒一枚起精

もろくわの物もろくの上
まてさうやさくはものや
あつた又かんさくいふこと
飲つたやもあつたははれ
おふの南を河原に伝へて終
ひぬくははさると思ひとて
一杯のむしりおふははれ
但之れ四種の書物とやのれ
ひの海客も決定しぬ
き海客もさるとあつち
舞ひのあつたははれ
ハニその書物とれひは
性さうしあつた
人かたと二代の法を
一文不意の身あつ
下らんやもあつた
一向の海を飲了
右飲海一枚起精の書物
の存のよふ

志を了す樂のまよ。一あ人の心と
子星を爲く日陰のちいし
と却て及る所のよふやう
日未だ能はざるを
のの飲料言ひまらんお書
きしれあ楽一毫の
寛ふゆひ

自後の初

直にまて人を不格と付ら
忘るくを忘るく
考ふ鳥を付て一物
附しけあ時未だ
向といふ

子心美若乎く掛ぬより一床
にのりぬきぬかたすのりく西公よ
中化なちしと雲一夢の公きま
あつて大海をぞくぬかひつる
と宮しと大海のつゆぬかひつる
る

船のあひつらぬしとくぬかひつる
あひつらぬしとくぬかひつる
あひつらぬしとくぬかひつる
あひつらぬしとくぬかひつる
あひつらぬしとくぬかひつる

十七日 共角丈 七巻

○
そとよあつたぬしとくぬかひつる
もたつて存洋ぬしとくぬかひつる
ひる松帯やん

一思きえよとの句
かす崎の松をたよる掛ぬし
ふたつとあつたぬしとくぬかひつる
そとよあつたぬしとくぬかひつる
ふたつとあつたぬしとくぬかひつる

一此秋は美のゆきとくぬかひつる
とあつたぬしとくぬかひつる
ともあつたぬしとくぬかひつる
そとよあつたぬしとくぬかひつる
ふたつとあつたぬしとくぬかひつる
ひる松帯やん

一廿角のつらぬしとくぬかひつる
ゆきとくぬかひつる
かす崎の松をたよる掛ぬし
ふたつとあつたぬしとくぬかひつる
そとよあつたぬしとくぬかひつる
ふたつとあつたぬしとくぬかひつる

一滋音方後作屋望雲とあつたぬし
とくぬかひつる
五月十二日 芭蕉松若

子那き傳

○
乙州上はぬしとくぬかひつる
大和にゆつたぬしとくぬかひつる
ゆきとくぬかひつる
かす崎の松をたよる掛ぬし
ふたつとあつたぬしとくぬかひつる
そとよあつたぬしとくぬかひつる
ふたつとあつたぬしとくぬかひつる

子ハ美ノ華也ト撰物トシテ
江ノ上ノ水ニハ何ナリト云
中ニ在ラシト寫シテ其ノ
名ト大海ト云レテ其ノ
文字トシテ大海ト云フ
也

於テ其ノ水ニハ何ナリト云
其ノ名トシテ其ノ水ト云
也

十七日

七巻

其角丈



といふ事やいふ事とのつらさ
 甚しき事ありしつらさ
 もそのつらさは中々との身なり
 へくやーきつらさなりとも
 不埒ありしつらさなりとも
 甚しき事なりしつらさなりとも
 甚しき事なりしつらさなりとも
 の初めと終りとありしつらさなりとも
 持病ありしつらさなりとも
 てありしつらさなりとも
 此の事なりしつらさなりとも

四月三日

芭蕉

芭蕉
 芭蕉
 芭蕉

の後ぞやう〜〜の海と光
よひやう〜〜又な〜
け〜く月よ立懸の世よとけ〜
あひく〜く〜く〜く〜く〜く〜
二光の光を立取時〜ものた
あ〜〜〜〜〜〜のまきひて
あ〜〜〜〜〜〜のまきひて
あ〜〜〜〜〜〜のまきひて
あ〜〜〜〜〜〜のまきひて
あ〜〜〜〜〜〜のまきひて
あ〜〜〜〜〜〜のまきひて
あ〜〜〜〜〜〜のまきひて

いさやしい中よりん若くも不業
いさめはのかきりとしむ

一 正なる子規の白鷺。今い及中
おむつう。されゆかしも又通不
はらた此をのこゆゆとさ
とらあふかむ状もくれあふ
けすつていりそむ状もけむ
ふらあふかむ。あつておひい
ありふ

一 赤女及成人おそ免女を
あむい

お月一日

てまひ

あま様

○

奇縁守徳おあつていひを
母杖のゆきむすた子母
いゆめいふなめ。物老持あ
もあまもあつていひ。良縁守
つてあつてあふ

一 乙おい戸へまけ付法のゆり結

つていとあまよりち紙鉄のた
てをゆきまき。物老もあはれけひ
難あつ

一 赤仙さもく感んはふらふ
ゆり結つていひ大切の風雅
あつていひ。あつていひ。あつて
いひ。あつていひ。あつていひ。
あつていひ。あつていひ。あつて
いひ。あつていひ。あつていひ。
あつていひ。あつていひ。あつて
いひ。あつていひ。あつていひ。

一 回名さくは科とさるは業一袋
さるな一袋はをさつていひ。あつ
志難あつていひ。あつていひ。あ
つていひ。あつていひ。あつてい
ひ。あつていひ。あつていひ。

一 赤いけあはれの子先の原切
まふあふあ角物。あつていひ。あ
つていひ。あつていひ。あつてい
ひ。あつていひ。あつていひ。あ
つていひ。あつていひ。あつてい
ひ。あつていひ。あつていひ。

紋様美の巻

五月廿四日

芭蕉

小枝様

侍人の菟若て早す花の春

何人かこゝろの心持をさし

菟と云く侍人のすすも

○

然るに物束はる難備物給ふ
恥重なるべきとの人々
女子をも集り我を菟若の菟
中をさしこいけ侍先玉
より一向書をしらぬ人
万吹てやせやと夜ひ
麻笥も木若より豊ひ
時を備もつ侍つ侍り
多難備他人の心
口面傷あつて是もな
おまにわつたれを
何れもお意平の物細
へ謝礼致すくい教生の

かゝる難備も只吹ひ
かゝる難備も只吹ひ
くねとあも散りおも
人のさへ半まてとり
あつてははと心とお
くもあつてははと心
云々のふくむとあも
尺取のあつてははと
へ教へてははと心
ちりひはと心とあも
よ入るのふくむとあ
も同くははと心とあ
よあつてははと心と
これいふあつてはは
摺餅よ小袖のねや
菟の人もあつては
すも人武林連中
ほかの字様紋白
ねとあつてははと
中の人にもあつて

はしりてすや

うらひすや海に集する極の足

二月十六日 芭蕉宛

一笑候

又武士の教生するものありと
云人ツ中々天邊方を捕く
縁く免をもぬすしこ
只心の平きなるはこれ
の彌沙ツ中々方これより世
りて免料理より飛上り
すしこ

○

附合十士休ぶ我と記を初
くま戸をさすすしこは術
のつぬらちよは味と付んと
すしこ却て一向七相に附合
も志おぬすし其のふ又
むしこ一まのぬりぬ味
はさすしこすしと退くも
何ものそし術すしは

極の一向まのふし其むし
うきうきし人の付あつしこを
我の書何のむ情あつし巻し
て付て変化ありしるくぬし
さしぬよ人のお城さるさおそれ
くはすしぬらちもくぬらちのみ
致しぬし初らるる切老むし
て二三向も踏さる上より不
付くも空天より砂をさあると
しるくぬらちのふ能くさるぬ
扱は成らぬ鬼に鉄棒よりて
有る門人の中にも七人あり
て妙法被し名やぬえさるし
も付合の術さはとむぬよ人
却てさしぬすしとあぬよか
くしやさるしぬらち十七件
をゆきら上り子変万化の術
とさるぬらちぬらち付ぬとよ
ぬらちよりぬらち付合の子変業
化とほすぬらちぬらちさるしぬ

けりてはるべき

くくしすや海を棄する杯の足

二月十六日

芭蕉宛

一笑候

又武士に教生するものありと
云人ツ生く天邊を捕く
猿く免もぬりすくく
只心の平きなるまれく
の彌沙ツ生く言これより世
りて免料理するの罪は海
すくく

○

附合十七位の子孫と記をす初

十七体の法もしくはくして何そ
 子受万化の働も出来ずが百
 顔子白く及ても附心二体とせ
 不中い知るるものいひい小急い
 とやくくくく事おほく候るい
 人ごあけて通しおほくおほく
 只四五人同心の連中くも其化を
 そくくも言は成かけそへは後世
 守遠那とくも言はれいひひ
 師くくく連中業くもあて
 此事

六月廿七日

大徳

小枝換

名月も懸る候よあされ候て
 けりくくくくくくくくくく
 定ぬかていひる名月さくもあ
 るくくくくくくくくくく
 白くくく

釋の穂けりくくくくくく
 然もくくくくくくくくく
 ぬくくくくくくくくくく
 先の舞の目か生れ人挨拶
 男方りまのむねや秋の月

八月四日

大徳

子形換

居士秋の坊東結の跡跡りく
 仍秀宗大業文信先の御縁
 命の命の命の命の命の命の命
 十年頃日いさうりともえん
 其くくくくくくくくくく
 こそ一入ッあつてくくくく
 の跡の跡の跡の跡の跡の跡の跡
 中くくくくくくくくくく
 と系りる又も命の目もあて
 中意ッをけくくくくくく
 不古ひくくくくくくくく
 まあくくくくくくくく

起しおしひりすりすの影もあ
物志候山危社山ふをいふ
痛くは痛き障りし病を
危くは危き病の影もあ
アもは風の中をさす
すあふしすをさす
下血好は好くは好き病
たりは善き境福旅を付
の方をくは方よくは方
ヤ大なる量なる速達の
中より市を好くは好き
有の中を随分好くは好
三好の好者好徳好生
るの好くは好くは好
あは成ぬあはれは好
ふは及まき好

七月十七日 壬辰
牧寺柳

○ せんやうほくあはれは好

沙汰中しくあけ元心ある
あは管結束し大板より
直に折れおともはあはれ
あはれはあはれはあはれ
中上林三入をあはれ
管見やあはれはあはれ
有のあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ

卯月廿一日 壬辰
すまは

○

一最白の影もあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ
あはれはあはれはあはれ

葉抄よちちくの念を好けり
 まつた思能あふふ人か付さる
 出ーまた二度西上人と思ひ入
 一とさすしとさす東のまの
 とまの菰かううと引付の毛
 びたけのうまとい思ひまはし
 くら

卯内中

と兼

いぢよし

あつよし

〇 〇
 一松屋薬店その白物出て居
 引さくそのれやと直一かみ
 振子よは留てんふよは留
 い服てい草そ神祇退若
 祝儀中式備活き人の挨拶
 す人く家より上さる人の数
 白よきをぬりひふあもひ
 今よりいそ存の少くも挨拶

抄の振子よは留てんふよは留
 うらなひあふり彼も一とあ
 うけらるあ人といふ不束ふ
 入くし山中向善もい物
 のひり善あくあもい付事
 いはばあしくい物信あ残
 そくし入くもそくあ文書あ
 草此のも能もよりい山中
 向善くい思加くは思加く去来
 又草凡非正善あ好とも向善
 入てよりいい物付勢りうり
 身三四向の付てそそりやと
 のあはらういめいいまの西玉
 中もい付るるあ中酒下飯
 いされとも件あく用い中も
 う方件あを先よ言移も難中
 いちと祝能内用そと捨く死
 りり中も、件あ使り次あん
 のり中い西あといや同好
 被後う方そいん物於いれ指

こといふはやくいふにしるすのよあり
 二十六七の事以て実府人集落
 としていふは遠く二人家と三人家と
 りいふとも知るものありは物なる
 こともりなる論に定府對分のあり
 といふにまゝの言ふはさういふ
 といふのいふはさういふにさういふ
 りあつたりといふにさういふ
 といふにさういふにさういふ
 といふにさういふにさういふ
 といふにさういふにさういふ
 といふにさういふにさういふ
 といふにさういふにさういふ
 といふにさういふにさういふ

十月十日

壬午

水枝換

〇 覚

- 一 もら米 一 升
- 一 くろ豆 一 升

一 河井 〇 元合

右に夕合の相合に成り
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇

十八日 壬午

八八拾

〇 山月桂雲門餅
 屋後松葉越別茶
 併に後子のひまをひの松
 中らちかくろいふにさういふ
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇

甲六日

後化様

桃吉

○

けはく能所殊の外ふも其まゝ
いやは中を空を止つて
む其角うまふふあふま
及ふはとひて驚ふやう

廿二

と吉

仁吉様

○

善道は四苦はつては子履
初松魚の橋前よりたは
石の似合へる人ともあえ
とあつちさう追付糸上

桃吉

おちおち様

○

又とえん小舟の中心ゆくと
昨日は後化はつてあつち

然知時お燈籠一宿のむくま割
筆の先持のねく用へるを聖
板下後化はつて人よつち

七

と吉

板の丈

○

二百後化の難くも先を忘るも
の知ふあつちよん心は後化肝要
とあつちよん心は後化肝要
はとちよん心は後化肝要
りよん心

一季の家くつる事あつちよん心は
け事さうとくち考法さう
入る増山井の南の敷

十七日

と吉

映山楼

○

傘の跡はつたをさつちよん心は
ある板帳前さつちよん心は
よつちよん心は後化はつち

殊の外掃除仕了

七日

とて

三頑指

○ 新麦一升半に中油の中を
湯を沸かして湯をのぼせ
湯を沸かして湯をのぼせ
湯を沸かして湯をのぼせ

湯を沸かして湯をのぼせ

○

拭屏風をわすれぬ
おぼしき掃半せんとく
おぼしき掃半せんとく

おぼしき掃半

とて

おぼしき掃半せんとく

○

おぼしき掃半せんとく
おぼしき掃半せんとく
おぼしき掃半せんとく

おぼしき

一人との一軸に湯をのぼせ

一人との一軸に湯をのぼせ

一人との一軸に湯をのぼせ

一人との一軸に湯をのぼせ

一人との一軸に湯をのぼせ

一人との一軸に湯をのぼせ

一人との一軸に湯をのぼせ

廿四日

芭蕉宛

芭蕉宛

○

おぼしき掃半せんとく
おぼしき掃半せんとく
おぼしき掃半せんとく

おぼしき掃半せんとく

おぼしき掃半せんとく

おぼしき掃半せんとく

おぼしき掃半せんとく

おぼしき掃半せんとく

おぼしき掃半せんとく

おぼしき掃半せんとく

支考文

予秋月とてかきよして書きたる
たねくはたしとゆたにゆたに
尾物熱田とてはとて休むる
人なまきとて急受ちた敷書
そのひびきのうらぬやうな
のくくふちと梅の白く
くは花しとてしとてやふ
ゆえゆらたしとてしとて
しとてかきよれくはたの
ゆくゆくをしとてしとて
梅のくはたしとてしとて
四月五日

其角難書

梅のくはたしとてしとて
しとてかきよれくはたの
ゆくゆくをしとてしとて

三月十日

二月十日

武陵書

梅尾老人

○
ほとぎんを換へてやあの上
一巻これと換へてや杜宇
水光梅より白く換へては
あふの字も白く換へては
ゆきとやと換へては
あふの字も白く換へては
たれいあふと換へては
横江の白く換へては
時い白く換へては
ともこの字も白く換へては
くつろけとて白く換へては
きよとて思ひ付くはたの
とてくす内とて白く換へては
安道れとて白く換へては
きよとて思ひ付くはたの

いふ事くす入らん

卯月廿二日

大義

月夜文

○

井のくみかお智の月見の事
有く白く入る事にはあつた
て是の事にはあつた
まじり白くあつた
ふれらの事にはあつた
月夜文の事にはあつた
ふれらの事にはあつた
友の事にはあつた

十八日

拙書

月夜文

○

只今田舎の宿屋に三人集り
如く言ひ明かす事あり
あつた事あり
海にまじり酒二升入り
いふ事にはあつた

招くかたを話したる事あり
引合をすしとわく事あり
入らん

二日

大義

かきや大義

○

保生伝あまの事あり
先の名れり事あり
少将尼の事あり

大義

菊の事あり
井波の事あり

金屏の事あり
新廣く他ん事あり
能事あり
あつた事あり
くみ廣き事あり
も事あり
是向消息あり

仰ふは神の孫の孫の孫の孫
後初る能はたやうと云ふ物也
も之く能はた言孫也く連枝一
通は枝のこゝと大垣大垣の
いふい物也のよき方なれは
字より其のそのぬりゆりて
い被らんといふ南のゆりといふ
ひれ場のい
上の方迄は残るは中し酒の
中の中もいふておふは後
ん拂大を我四夜はあはれ
おふ屏風は入用といふは
中い老井のいふ七日けい
あひていふ葉のいふい
是ていふいふいふいふ
おふていふいふいふいふ
も給飽いふいふ

十月九日

もて成

許六難文



進者へはは後之後志抑也
ひの京の孫の孫の孫の孫
とていふかす九由りといふ
是りともいふいふいふ
赤葉といふはいふいふ
お付しりといふはいふ
上のいふを能はたといふ
何といふといふいふいふ
といふはあはしはいふいふ
美やといふいふいふいふ
能はたといふいふいふいふ
捨よりいふいふいふいふ
右のいふといふいふいふ
是其角也といふいふいふ
能はたといふいふいふいふ
あはれ

廿二日

もて成

秋月文

都よりいふ

おひといふいふいふいふ

体ふは絆の務もは破りせん
後初る姫社もやうきふゆ
も久く能くを語りて連状一
通は状のそとて大垣大坂も
いふは初まの由るふ致くは
字々文章のあはれゆりて
し扱らんふと南のめまると
ひれ増りひ

上才途途は我の甲の湘ひふ
ゆゆもあやうきおふは後
石橋大を我の夜はあはれ

○ 一宗波老老之友了心乃て其
空の妙高老とていふ人其より
とありしと云ふ山成ての事
也

六月三日

拙書

格之様

○

ふはとて可く歎心月四日

大は後の事此より先き何件
重なるかおのよとて一休
みしとて言葉且おのよとて
ふはとていふ事

と云

出水編

○

能く説く事とて其持意は
事此のうとて終る事此
も此の事此の事此の事
此の事此の事此の事

○ 一 此の事此の事此の事

此の事此の事此の事
此の事此の事此の事
此の事此の事此の事
此の事此の事此の事

○ 一 此の事此の事此の事

此の事此の事此の事
此の事此の事此の事
此の事此の事此の事
此の事此の事此の事

○

一 此の事此の事此の事
此の事此の事此の事
此の事此の事此の事
此の事此の事此の事

寄信ふらるるの性のかゝる世
予あつもの失や想ふ使ふ由
子性のかゝる二才兄弟の性
これにおもふ事なき事
ウキウキ

二月廿五日

七歳

好六雜文

○
毎夜母のたゞのつとふ付ちと
尸の無事な用かたつとも
くと押さつりやいんく思ふ
成る思ふ事志のきう子
中程を精分つとくはとよ
阿中くことくや中く
何そくもくはけけけけ
と無事な用かたつとも
志のきう子
はる波を寺町の秋田屋
志のきう子
中程を精分つとくはとよ
阿中くことくや中く
何そくもくはけけけ

そりし月三知の事
とうく指すたやんは
又も指すたやの十二
くりの後くそくは
いふりや指すたや
お中の人あつた
せこの人けりや
中程を精分つとくはとよ

十三日

七歳

和体文

○
板橋橋
二月七日

○
けりし月三知の事
とうく指すたやんは
又も指すたやの十二
くりの後くそくは
いふりや指すたや
お中の人あつた
せこの人けりや
中程を精分つとくはとよ

在成言成程情を承りおしめり
能程と程如きと程
散句も程引て程とある方ら程中
に程りる程り

○ 日比子史の程りる程り

○ 中々父母程りる程りる程り
やうく程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り

程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り

中々程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り

二月廿二日 芭蕉

○ ぬ程りる程り

程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り
程りる程りる程りる程り

息女ハ入嫁申付候由候共
 扱合由共申付申上候事ハ
 下申候由共申付申上候事ハ
 万定由共申付申上候事ハ
 の事ハ申付申上候事ハ
 扱合由共申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ

二月十二日

芭蕉

芭蕉雜文

○

一月十六日かきあふと申上候事ハ
 扱合由共申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ
 申上候事ハ申付申上候事ハ

壬五月廿一日

芭蕉

塚 布田 布引 箕面

古塚十三 善寿塚 善塚

越女塚 清雲石塚 忠度塚

敷盛塚 人麿塚 通盛塚

松尾村由塚 越中前司盛徳塚

河東右衛門忠實塚 良将塚塚

能因法師塚

峠六ツ 琴引 駒峠 今が原

峠 岩や峠 小峠峠 櫻尾峠

坂七ツ 熊坂 ^{西上} 坂 坂 坂

寺野坂 今が原 不動坂

少重坂

峠六ツ 五尺山 安孫嶽

高野山 下川久保

猪尾古山 重徳古山

比奈橋の敷川の敷名もくくぬ

山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山

卯月廿五日

万菊

桃青

惣七振

○

寛文の頃 海客の船が来た

頃 舟が来た 舟が来た

舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

五月廿日

桃青

七重七振

○

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

舟が来た 舟が来た

のものと十方とてしあひつら
えりしは方と名をてしお侍は
下を了りてし

一 好之由也 好之由也 好之由也
一 采明尾 採明尾 採明尾
一 孔不 孔不 孔不

一 采明尾 起 起 起
一 一 一 一

一 一 一 一
一 一 一 一

一 一 一 一
一 一 一 一

一 一 一 一
一 一 一 一

一 一 一 一

○

遺物免

一 二日月り記

一 散白書中

一 煙木

一 新式書入

是ハ松風ノ遺物也
中書ノ遺物也

一 文字及本

一 松風ノ遺物也
一 文字及本

○

一 松風ノ遺物也
一 文字及本

一 松風ノ遺物也
一 文字及本

元禄七年十月日 在任所

○ 清先のきりあはれ命の思ひあはれ
振とも又た是の作りの御年奉
心静かに臨於るやあはれとて御
上の御座り申す事次第に御座
る事先を付しめ御座りて御座
新し申すも十た是の御座り及
かへ御座りて御座りて御座り
是の御座りて御座りて御座り

十月十日

桃吉

松尾軍の御座り

新座の御座り

○

ゆふみ下新の御座りて御座り
く御座りて御座りて御座りて
あはれ御座りて御座りて御座り
〜御座りて御座りて御座り
〜御座りて御座りて御座り

むいごの御座りて御座りて御座り
けの御座りて御座りて御座り
ゆの御座りて御座りて御座り
たの御座りて御座りて御座り
おの御座りて御座りて御座り
ゆの御座りて御座りて御座り
おの御座りて御座りて御座り
ゆの御座りて御座りて御座り
おの御座りて御座りて御座り
ゆの御座りて御座りて御座り
おの御座りて御座りて御座り

年

在任

御座り

○

御座りて御座りて御座りて御座り
御座りて御座りて御座りて御座り
御座りて御座りて御座りて御座り
御座りて御座りて御座りて御座り

御座りて御座りて御座りて御座り

御座りて御座りて御座りて御座り

御座りて御座りて御座りて御座り

御座りて御座りて御座りて御座り

御座り

在任

を流す事干白魚一葉少
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤

心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤

心付く物を為す言色服赤

心付く物を為す言色服赤

心付く物を為す言色服赤

心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤

心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤
心付く物を為す言色服赤

又白魚中何流於魚之
高きゆくと

贈其南先生書

板高奥羽のひ新より秋人
多ひく此高門の能能巴一
す我字多をひ能能よ高ひ
を着拂今よ受て器々かむ
よをえさうひひ花の是
手付又ひひの影を起さ
岸信後後らんくす高向之
風種尺及よ西次菊よひ
すうふ新 葉よううひひ
のういふく葉よ門人
流のよ俗をんて改おん
是をゆりうよ子葉不易乃
姿まご時流ひの流まひを
端よを一ふふもをな
一知るふもに能雅の能を
くく不易の向を改され

まさしく申して申すに必汗
 襟をひききりしるは申すの
 古格をあらくはたしとて
 形承くはよしうは角を以て
 観の草力よありとてとをん
 為田汝も怪むく角やと
 今さらの体はよおとて
 り来りてとてくの内原を社
 切事んもあつてはとて
 さつとてしを待ては月
 何んてはたけくのふらや
 よ退きぬわてつて
 むあへくはとての事はつ
 今も生とては東西を
 くみをりてはつて
 松栢を好むの歌をて
 幸よばとてとて
 勝よ先とてこれとて

丁丑のく二月の口

為柿合暖味七集拜

昔ハラの備利とて
 今ハラの備利とて
 昔ハラの備利とて
 今ハラの備利とて

二日

大松のちとて感はつて
 今もつてのちとて感はつて
 今もつてのちとて感はつて
 今もつてのちとて感はつて

梅石大

はまち入院のちとて感はつて
 今もつてのちとて感はつて
 今もつてのちとて感はつて
 今もつてのちとて感はつて

二日

梅石大

古をいかに芥とて感はつて
 今もつてのちとて感はつて
 今もつてのちとて感はつて
 今もつてのちとて感はつて

梅石大

二日

小意の目よけに結しひびくろ二寸の
やとらむのしりし

梅石子

七歳

かけとくぬ肉味をよろしくくろ百を
影の

梅石火

七歳

柱のや仔弱の嶽のねとあり七歳
寺山娘赤ちりるる娘入袂より目
ゆをたよろしく影の火

梅石火

七歳

新葉つ熟うこしけあくとん
ふちりる子う乳影の

梅石火

七歳

魚の厚のまふ種やまは家 芭蕉
藤中あつし叶のりく空

此葉細のぬしやと種 七歳
上りふさふさ

雪ふくふさゆの種のを影や 七歳
けし虫切火

みちのくへそ達のうら旅の梅を免
うらやましくくもむあれ一白
をりし

三月十日

七歳

梅石火

ふちたさうらみ影の種梅が 七歳

ゆりさうら入る赤あやうそさる病あや
親青の目よりくくはく此葉たふさる
らりし

三月

素園火

七歳

一丁板の葉を信るあつしとん返るあつ
ともうこれ中あつしあつし中をたつ

梅石子

七歳

はりすあ

そらう梅のかろあ井や 五歳
そらう梅のここのうら葉あつしあつし

のし 此葉あつ

まゝとてあつた一袋を返すと云ふなり
方丈のふりくたつて

了仙坊

と哉

藤原の神ある
張りよりよる

海へ吹かす家ありて月宮の 土哉

雪ふぬまにたか納めありて
入せんくまのそとに

おとやとの

と哉

今又村て神のまつりて
風成るのこつてお天神の中を
宿るはれ中只今ありて

のりて

九の千つ

梅石丈

と哉

はと

夕飯にのつて
神のえいふそはと
きりぬる

と

と哉

九右衛門

あまや箱かよるなり
時ありぬまに
のほり大相寺入院の
あり此一折りあり

千の十

梅石丈

と哉

はと

船豆も来波つて
後子相織か来り

梅石丈

と哉

と既度申は短刀の
後しと念ふ

梅石丈

と哉

草花も草中つり
輪の輪つて

はと

あつて
不校坊へ

と哉

何ともあつらふやまおのそくまゐるも
おの甲子のはじめにおのそくまゐるも
しつとけいせいのな

この入子と書きてはたそと都に
松林と竹のやうな松の如く

梅月出やうき松の松の画に
うすけかちやうき又と出せし
中かきとて

あつた

青山

は

或る殿の御題ありくわきの影
あつたの影に
あつたの影に
あつたの影に

十

梅石

う

病後回復の和歌浦詠行

梅石の影に及らね侍の

十

梅石

梅石の影に及らね侍の

あつたの影に及らね侍の

あつたの影に及らね侍の

あつたの影に及らね侍の

七月

梅石

は

梅石の影に及らね侍の

は

梅石

梅石の影に及らね侍の

梅石の影に及らね侍の

梅石の影に及らね侍の

梅石の影に及らね侍の

らんせれとくつ

梅石丈 下

七歳

五丁

崎の林は昔より高きれどもしれぬ
御所にて定法もさうけり此の形
おしし付の御

梅石丈

七歳

八月十日

九月十日

下戸の才より此の田の月夜

この社の社名は清浄なるが故に
いと水清くしや二寸の深さありし

その月夜

梅石丈

七歳

めいししは御所の御所の御所の
けあくな

圓ひろき御所の御所の御所の

し

多助はゆめしとなりおつた

おししは御所の御所の御所の

し

梅石丈

七歳

この社の社名は清浄なるが故に
いと水清くしや二寸の深さありし
おししは御所の御所の御所の

し

法泉寺方丈

七歳

八月十日

この社の社名は清浄なるが故に

この社の社名は清浄なるが故に
いと水清くしや二寸の深さありし

八月十日

梅石丈

七歳

この社の社名は清浄なるが故に
いと水清くしや二寸の深さありし

梅石丈

七歳

今日目も交そんし 龍と流す
多し 明の歩多し 時分から風流
うし中し ころ 龍より 龍より 龍より
る 龍入

梅石文

不意

五月もおつき 龍く 龍く 龍く
一寸も入 龍のり

淋 龍と 龍と 龍と

かや 龍の 龍の 龍の

森 龍の 龍の 龍の

お 龍の 龍の 龍の

五月十日

西事寺納不

不意

龍の 龍の 龍の

龍の 龍の 龍の

梅石文

不意

龍の 龍の 龍の

梅石文

不意

龍の 龍の 龍の

四

不意

龍の 龍の 龍の

六月

不意

龍の 龍の 龍の

五月も おつき 龍く 龍く 龍く

青山 龍の 龍の 龍の

新六指

不意

文性 龍の 龍の 龍の

まゝのひるひのひるひのひるひのひるひ

八日

梅石丈

七歳

冷泉原の舟にまゝの梅石の舟に
送るよふにありけり

七歳

美里の春は休む

中しつゝ笑ぬ雲のやうなるも
万葉原の内より初産あはれし
月夜に交はれし梅石の舟に
うづり哉飛鳥が性はついで

梅石丈

七歳

去来梅石の舟に梅石の舟に
明後日の舟に梅石の舟に

め

梅石丈

七歳

舟に梅石の舟に梅石の舟に
建ひやし舟に梅石の舟に
り

梅石子

七歳

梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に
梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に
梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に

青心丈

七歳

梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に
梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に
梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に

二つ

七歳

梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に
梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に
梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に

七歳

梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に
梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に
梅石の舟に梅石の舟に梅石の舟に

七歳

まゝのうゝのうゝ〇〇

八日

梅石丈

と哉

冷泉原の舟のまゝに梅石の舟に舟
送り下流あり

と哉

梅石丈に休む

すゝ咲ぬきの所ももさききと哉

万葉原の内より初産ありくうけて

目物交あり七拍して名付すしす

う中哉飛若性河の中

梅石丈

と哉

去年梅石の梅石を吹く

明後日のあゝを常しく

あゝ

梅石丈

と哉

草花のあゝのあゝを吹く

中連ひやう中連ひやうを吹く

り

梅石丈

と哉

後のまゝに梅石を吹く

吹石のつゝし梅石の中明後日のあゝ

むさめりの梅石を吹く

梅石丈

と哉

和歌の浦梅石の梅石を吹く

吹石のつゝし梅石の中明後日のあゝ

入院のあゝの梅石を吹く

せんやの梅石を吹く

梅石丈

吹石のつゝし梅石の中明後日のあゝ

吹石のつゝし梅石の中明後日のあゝ

吹石のつゝし梅石の中明後日のあゝ

と哉

吹石のつゝし梅石の中明後日のあゝ

吹石のつゝし梅石の中明後日のあゝ

吹石のつゝし梅石の中明後日のあゝ

と哉

此の如く抄し、為りの由りも
不承なるは、其の如くは、梅
と云ふの如く

二月二日

吉成老人

町内栗のこまれ中、此小刀の如
き

此葉は、今この如く、一層、梅
と云ふ

と云

此の如く、ある葉のみ、一葉、雪の如
き、一葉、一葉、一葉、一葉、一葉、
か、一葉、一葉、一葉、一葉、一葉、

云々

好風松

と云

梅月共

葉面より、ある葉と、ある葉と、の
門松の如く、ある葉、ある葉、
ある葉、ある葉、ある葉、

十二月十日

雪の如く、不破の園の、人の、と云

十二月十日

雨敷雪を、ある葉、ある葉、と云

云々

雪の如く、ある葉、ある葉、の、
と云、ある葉、ある葉、ある葉、
と云、ある葉、

云々

雪の中、ある葉、ある葉、と云

雪の時、ある葉、ある葉、と云

雪の如く、ある葉、ある葉、と云

と云、ある葉、

二月十日

吉成又助

雪の如く、ある葉、ある葉、と云

信長が来りし

と云

口上

此山は戸へおちりしすしは中世に於
てのりかありはくはるの徳の
しとらち中世の

梅石文

と云

口上

此みやけはかみさう二丁四割のり
にありし

口上

まの

と云

ぬれ美とておちりしは中世に於

て中しおちりしおちりしおちりし

好味ありしは中世に於て

ありしは中世に於て

十日

智恵老人

と云

文切る 危知来るの徳の一舎
の徳よりし水知徳

梅石子

と云

高秋はきく徳ありしは

うけりしは中世に於て

しとらち

と云

梅石文ありしは二人の徳ありし

後の世にありしは二人の徳ありし

初出する本ありしはつ新茶のみ

うけりしは中世に於て

と云

みちのく志のお徳此石を福島の

徳より東一里計ありしは里人を

うけりしは中世に於て

て此石をとりしは中世に於て

この谷にありしは中世に於て

ありしは中世に於て

小吉部後何やとわくしりて
多くとりてしりてしりてしりて

有之。

久八夜

七夜

昭和の御事と風と事治地とな
たわれしりてしりてしりて

梅石文

七夜

口上

第参りて実義とてしりて第一
後系とれは事の中し

在り。

七夜

之井と観音と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と

七夜

此の事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と

在り。

七夜

お出たは事と事

何しりてしりてしりてしりて

飛山と事と事と事と事と事と事と
換りしりてしりてしりて

梅石文

七夜

松茸と事と事と事と事と事と事と
何しりてしりてしりてしりて

梅石文

七夜

志川と事と事と事と事と事と事と
何しりてしりてしりてしりて
雨と事と事と事と事と事と事と
何しりてしりてしりてしりて
よも事と事と事と事と事と事と

梅石文

七夜

みん一勢子観十と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と

あり。

七夜

小吉部後何おとれし人いふも
是くもいふもいふもいふもいふも
うよ

二月ノ。

久八夜

七歳

唯お討市之風も事治地とな
たかれし四月申さうれり

梅石文

七歳

口コ

第善く賀美とてよた兼一
樂系とれは事の中し

たろ。

七歳

之井と祝喜子といふ妙名梅
と云一すうかこし

七歳

此のころを徳ひとせしめり
何とせぬれり

若らう夜

七歳

若出たきこた

何ういふいふいふの如くは

飛山といふ事りしすし方ふの事
換らりしの中り

梅石文

七歳

松茸すまやかし一葉一葉とせし
何り次すんせのりいふ

梅石文

七歳

志川はまはす急なる事すうと
唯文字は氏の名かんと事おれ

由はひいふくぬれは事人未なり
唯日は葉次すてて事申さる

梅石文

七歳

みん一勢了腕すて事なり
事面りれり

あ。

七歳

先のりも... 寺... 月十日

梅石文

七歳

口上

文... 紙子... 相成...

おろもとの

七歳

口上

乃... 竹の子... 中送...

おろ

おろもとの

七歳

おろもとの

青... 芭蕉二株

おろもとの

七歳

芳... 手... 乃... 七歳

口上

你... 杖... 乃... 七歳

おろもとの

七歳

乃... 乃... 乃... 七歳

梅石文

七歳

小... 乃... 乃... 七歳

乃... 乃... 乃... 七歳

返り

乃... 乃... 乃... 七歳

十二月二日

梅石文

七歳

三下
四下
先のりもよくそ前より約束し今迄
ま寺若くは及延引し本日十日
之由に候ふ事せしむ

八日

梅石文

七歳

口上

文はふ紙子とてひしりる相減り
下

おろやとの

七歳

口上

張るの種文書落る丈工用を

くすくすはくとも一寸の程の

右方り反

と茶

三

一落し目より一落し目まで

ろくろ入れ

右方り反

と茶

圓はた物より一落し目まで

右風練より一落し目まで

カ

と茶

此ゆきも昔山歩き後をぬり交

有り及延しやり一寸の糸と

ろくろ入れ

と茶

ぬり交と一落し目まで

けあくと一落し目まで

のり

梅石文

と茶

三

十二日午

被れこの成りてきつておき拂て茶

梅石文

ら

娘子文書より一落し目まで

茶あり後より一落し目まで

梅石文

と茶

物の嘴のこきとておき人柱の風を茶

くすくす目おきおきおきおきおき

茶ありおきおきおきおきおき

と茶

物柳親書出候

青柳の枝よりむすお佛をか

茶白く映る兒の画候

ツモレくこく起てらんおの雪

新茶目おきおきおきおきおき

お入り

梅石文

と茶

この道はゆい境のふり目物なり

と茂

是より一を承りてを面うれり

と茂

此は先寺庭中景致は明く一合具
りて物なりや承りてを

同。

梅石子

と茂

去來古地景事は月入りけり
是の時分より承りてを
れり

と茂

此より承りてを

梅石子

と茂

同。

此の岩戸の事つりては
二之升みや承りてを

同。

と茂

この中にあるもの
しけおくたを承りてを

梅石子

と茂

大なるにやの物なり

梅石子

と茂

同。

某師の事は明く承りてを
鏡山坊の物なり承りてを

承りてを

同。

梅石子

と茂

梅石氏書生承りてを

梅石

と茂

月宗は承りてを

同。

阿やめの事承りてを
承りてを

これのし

梅石丈

七歳

十二月

雪の降る馬の道を歩み我身は七歳

雪の降る馬の道を歩み我身は七歳

素山丈

七歳

むらぬお弟へお物さしりおぬおと
りおすまの味はういぬの味はういぬの
おひやしせんしぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの

四

太志郎丈

七歳

おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの

梅石丈

七歳

おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの

おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの

二月

梅石丈

七歳

四

おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの

梅石丈

七歳

四

おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの

梅石丈

七歳

おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの

梅石丈

七歳

おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの
おぬの味はういぬの味はういぬの

梅石丈

七歳

うれのかし

梅石丈

壬辰

十一月

雪のふり馬をたぬ我身はたき

山崎の山のおもひにすむせのり

素山丈

壬辰

むらぬちかきくお物さりけけぬ物と
りけりては味けり後より連れあひの
あけやしせんしうあされては
もけりよりてあすはともあひの
す入るる

四

太志郎丈

壬辰

けふたふちきききうるさくけり
ゆらゆらけり

梅石丈

壬辰

とててんうくら波よしかくさ
けり出来次第とさのり

おとんおせんこくういそふふ
うこむもやし是又おせん

二月

梅石の

壬辰

は

かろふおけりけりるそるわ
ふりあきくへりてけり

梅石丈

壬辰

は

そけりの人ふやいけりあ
あせのり

又の

壬辰

野を一歩亦為長也...
うれれ入る

梅石子

七歳

明日も序と夫と...
るるきのり

十一

梅石子

七歳

それも...
織る中粒の

梅石文

七歳

四月

初あそひ...
とあま...
らり

梅石文

七歳

屏風...
あそび...

梅石文

七歳

十月

おの...
あそび...
あそび...
あそび...

四

あそび...
あそび...

梅石文

七歳

あそび...
あそび...

四

梅石文

七歳

あそび...
あそび...
あそび...
あそび...

八月

梅石文

七歳

白くまのうしろの磯邊に
海を昇りて一ヶ所ありて
白くまのうしろの磯邊に
白くまのうしろの磯邊に

梅石丈

七葉

うしろの磯邊に
うしろの磯邊に

三〇

青少丈

七葉

大井口をさうとびて
れうろくろく

梅石丈

七葉

一ヶ所ありて
うしろの磯邊に

九月廿七

おもしろい

交りて
あつと

梅石丈

七葉

私平次うしろの本
めりあつと

梅石丈

七葉

あつと
あつと

梅石丈

七葉

伊之節
あつと

梅石丈

七葉

新米を
あつと

し月廿七

白雲の如く... 海を昇る... 舟の如く... 舟の如く... 舟の如く...

梅石丈

七歳

三〇

青少丈

七歳

大井... 舟の如く... 舟の如く...

梅石丈

七歳

舟の如く... 舟の如く... 舟の如く...

九月廿七

舟の如く... 舟の如く...

舟の如く... 舟の如く...

梅石丈

七歳

三月廿一

舟の如く... 舟の如く...

梅石丈

七歳

舟の如く... 舟の如く...

梅石丈

七歳

舟の如く... 舟の如く...

梅石丈

七歳

舟の如く... 舟の如く...

梅石文

七廿

口

何のくは事お海一修くを常
池河け経お好味くをれくし
度くおくくくくくくくく

口

梅石文

七廿

口

先のくそののめくキくおたす
あくくくくくくくくく

七廿

長くくすくくくくくくく
度くくくくくくくくく

七廿

未破威の

那上すくくくくくくく

七廿

くくくくくくくくくく
ありくくくくくくくく

七廿

梅石文

むくお強くくくくくく
方出くくくくくくく

七廿

口

まはくくくくくくくく
又五ゆあめの大坂くく
向くく時く船本くく
波くくくく

七廿

口

石村氏くくくくくく
くくくくくくくくく

七廿

おS

口

尾くくくくくくくく
歌くくく

七廿

梅石文

水くくくくくくくく
くくくくくくくく

梅石丈

七歳

卵の出入未お為くそあそおぼく
るゆゆ一あの中におぼのゆゆを
る思おしゆ

七歳

万者及んごめ今そあ友あ
け菓子少あゆりきそあゆり
ひりあゆり

梅石子

七歳

ふゆの松のききあゆり
梅りゆあゆり
あゆりあゆり

梅りゆ月出あ松のみりあゆり

一ゆりあ根あゆりあゆりあゆり

ゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

ゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

ゆりあゆりあゆりあゆりあゆり

ゆりあゆりあゆりあゆり

ゆり

梅石丈

七歳

こ

ふゆの松のききあゆり
梅りゆあゆりあゆりあゆり
あゆりあゆりあゆりあゆり

梅石丈とせあ

ふゆの松のききあゆり
梅りゆあゆりあゆりあゆり

あゆりあゆりあゆりあゆり

あゆりあゆりあゆりあゆり

五月十三日

ゆり

ふゆの松のききあゆり
梅りゆあゆりあゆりあゆり

梅石丈

七歳

ふゆの松のききあゆり
梅りゆあゆりあゆりあゆり

あゆりあゆりあゆりあゆり

あゆりあゆりあゆりあゆり

七歳

ゆり

ふゆの松のききあゆり
梅りゆあゆりあゆりあゆり

あゆりあゆりあゆりあゆり

梅石丈

七歳

ちまねを落しきりてしるすしるす
あつ内茂へもあつしるす

梅石丈

七歳

あつしるすのせんくくせんくく
かこひしきりてしるす

六月四日

梅石の

七歳

以上

茶屋千太郎の娘文子くち梅石
あつしるすのせんくくせんくく

五月五日

梅石丈

七歳

以上

梅石病入りてしるす
痛少もあつしるす

以上

七歳

梅石丈

浄土寺入陸次時由一三のり

この時の静少後れつし

以上

七歳

梅石丈

あつしるす大雷はしるす
延引のりあつしるす
う入来待り

十一日

梅石丈

七歳

以上

久八梅石をそくわんやのり
八梅石のりやあつしるす

七歳

以上

あつしるす
あつしるす

梅石丈

七歳

下

穂をこし一筋をその下へ送り
糸をこし一筋をその下へ送り

七

梅石丈

とせ

こ

その歳に實候紙一束をかくし一
筋を糸をこし一筋をその下へ送り

五九

とせ

七州に實候として根弁又この
より一枚送り下へ送りけり

目切をりし

山村の目切との

あ

とせ

おとさ女改名胡麻をきめとらけり
しり

乳母糸に注むとて於の番とせ

下

四約米し西明のまがし一合のり
此候をかくりし

又

とせ

小梅一筋をその下へ送り何よそ
とせ

梅石丈

とせ

明りし約米しりくさおとせ
四

二

下

糸をこし一筋をその下へ送り
糸をこし一筋をその下へ送り

十一

梅石丈

とせ

此糸をその下へ送りしり
下

梅石丈

とせ

半切申書きりし中より十四又まい
うつさるべきはたれか

と書

海山松野原の方ゆりて市と形知
致

梅石丈

と書

若る業いそしくありけり
けさうけしうし出来次第か

梅石丈

と書

梅善清言る事きりありしに
あつて内へ来りし中より

いよちくくうせりはたれか

十あ

梅石丈

と書

五あ

ふあめのりりきりて西のり

青山丈

と書

いもれ七ツそり只今うこし
いもれ七ツそり只今うこし

と書

いもれ七ツそり只今うこし

と書

と書

庄八頼用

と書

いもれ七ツそり只今うこし

いもれ七ツそり只今うこし

いもれ七ツそり只今うこし

いもれ七ツそり只今うこし

いもれ七ツそり只今うこし

いもれ七ツそり只今うこし

いもれ七ツそり只今うこし

八月十日

と書

知海坊

と書

いもれ七ツそり只今うこし

り

め。

久八落子神ゆえんやう行く言及延
引し長くおぬ

九〇

梅石丈下

不意

乙

赤心後秋あゝる酒おと只今を
のりたけい

大雲寺 納西

不意

智光和尚をたけあひのよ
たけいし中いし中あひ

之九うの村いし中いし中あひ

よ一はいりしよりしつら者て

神あわやられしはかたたけ

三

妙心寺 藤鏡の馬人ヤととて
形ちるひやし虫あふふぬ

けれ子そは中うぬいし中あひ

此想を角作せし中あひし中あひ

米いしし中あひし中あひ

九月三日

弟は前多くうをたお猫うか
しの中は長知る中付あされ

十六文ころぬ

八文あやうあさし中あひ

不意

桑一杉好風危より送る下
あさし中あひし中あひ

六〇

不意

初よりいし中あひし中あひ
神よりいし中あひし中あひ

久末の始おしし中あひし中あひ
中取一はしし中あひし中あひ

入

不意

はこ

佐伯し人の心の中へは辰巳の
セチ梅子と云ふを成

すめ

又卯の葉を中目出度な
作し赤飯一重赤あり

五月二

梅子

七葉

青のりハ ああ何けぬ投

とうふ一丁味噌ぶくぶく梅

たごい海苔今こころのり

七葉

大友のりをこころに盛せしめ

ゆりこ糸となく西のり方より

くちのりこの後とくちのり

四

七葉

梅子と云ふの自画

鶴鶴の足もとから梅子と云ふ

はこ

社月宿よりこの糸と云ふを成
くちのり

四

七葉

梅子

はこ

辛くはなれと云ふを成
くちのり

五

七葉

汗掻きぬ梅子をつり梅子と云ふ

七葉

そり梅子時分たると梅子と云ふ

大松寺

七葉

とうけのりひひのり今かか

まねくとも梅子と云ふ

梅子

七葉

次子寺

風を死に梅子と云ふを成

口上

和文のつゝ何と定法ハ其ノ終ニ至リ
又其のつゝ其終ニ至リハ其ノ終ニ至リ
其ノ終ニ至リハ其ノ終ニ至リ

梅石文

七葉

時もあれ並松へ若日なりなり

口上

其由時中より相く候へり
其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも

梅石文

七葉

其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも

口上

一節のつゝ其の終ニ至リ

神のつゝ其の終ニ至リ

口上

七葉

其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも

口上

其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも

七葉

其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも

十月十日

七葉

其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも
其の余半むむも其の余半むむも

其の余半むむも

七葉

酒よりいふに他のおまをいけむ
風味よりいふに結糸のくまを

梅石文

七葉

小野のうらやうつと一葉のつた
かろすおまの若くを

十葉

大坂より色物糸のうらや
寺のむせのり

梅石文

七葉

海小のゆゆへ糸のうらや
糸のうらや

梅石文

七葉

ひなまのうらやのうらや
糸のうらや

三葉

七葉

梅石文

結糸月迫のうらや
付のうらや

十二百葉

梅石文

七葉

此のうらやのうらや
万有のうらや

三葉

七葉

糸のうらやのうらや
糸のうらや

梅石文

七葉

糸のうらやのうらや

三葉

糸のうらやのうらや
糸のうらや

三葉

七葉

以上

村井与めく友江戸んらあしよひ
ふれんたのしよ

梅より

と茂

心井の名はあめりか

セウ

持文

と茂

以上

歳考、実後とてまらんちよ
ふれんたのしよ

セウ

と茂



